

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第 5 章 「五法と三性と縁起の決択」について

望 月 海 慧

はじめに

筆者は、これまで Tāranātha Kun dga' snying po (1575-1635) の *Theg mchog shin tu rgyas pa'i dbu ma chen po rnam par nges pa* (*dBu ma theg mchog*) に対する研究を行い、次の論考を発表してきた。

1. "On the first Chapter of the *dBu ma theg mchog* by Tāranātha",
『印度学仏教学研究』58-3, 2010, pp.(136)-(143).
2. 「Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第 2 章「一切の所知の境の決択」
について」『インド論理学研究』1, 2010, pp. 313-332.
3. 「Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第 3 章「仏の心髄である法界の決
択」について」『身延山大学仏教学部紀要』11, 2010, pp. 1-19.
4. "On the fourth Chapter of the *dBu ma theg mchog* by Tāranātha",
Acta Tibetica et Buddhica 3, 2010, pp. 129-154.

本稿はこれらに続くものであり、同論の第 5 章を考察したものである。テキストの全体の概要や書誌情報などについては、これらの先行する論文を参照いただきたい。

第 5 章のテーマは、そのタイトルに示されるように、五法と三性説と縁起であり、前章の八識説に続いて、瑜伽行唯識派の存在論が主題となっている。注釈書は、本章を五法と三性と縁起と因縁の四項目に分類するものの、最後の項

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第5章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）
目は縁起から派生するものでもある¹。

五法とは、五事 (*pañca vastu*) であり、相・名称・分別・真如・正智のことである。それぞれ、言葉により示される様相、事物を示す言葉、言葉による考察、正しい智慧により認識される真理、真理を認識する智慧とであり、最初の三つが迷いの世界を構成し、後の二つが悟りの世界を構成すると言われる²。

三性とは、遍計所執性・依他起性・円成実性であり、瑜伽行唯識派の存在論の基盤となるものである。この五事が三性説の前提になっていることは、*Yogācārabhūmi* において述べられている³。

縁起については、注釈書に「遍計性と依他起性は縁起そのものである」と述べられているように、縁起説が三性説に由来することが述べられている。縁起とは依存関係を示す仏教的存在論を説く基本的な教義であり、本論では十二支縁起の解説に重点が置かれている。縁起の補足として因果関係が説かれ、アビダルマ論書に説かれる六因・四縁・五果が言及される。すなわち、能作因・俱有因・同類因・相応因・遍行因・異熟因、因縁・等無間縁・所縁縁・増上縁、異熟果・等流果・離繫果・士用果・増上果である。注釈書は *Abhidharma-kośakārikā* を引用するものの、詳細については Asaṅga の *Abhidharma-samuccaya* に言及する。

第5章の構成

前稿と同じように、Tāranātha の弟子である Ye shes rgya mtsho (16th/17th cent.) による注釈書 *Theg mchog shin tu rgyas pa'i dbu ma chen po rnam par nges pa'i rnam bshad zin bris dbu phyogs legs pa* に基づいて第5章の構成をまとめると次のようになる⁴。

1 タイトルには因縁の語は含まれず、本論が依存関係の解説で終わっていることから、この項目は縁起に含まれるとみなすべきである。

2 横山2010, p. 247.

3 五法と三性の関係については、舟橋1972, 勝呂2009, pp. 621-681を参照。

1 五法を説いたもの

1.1 五法の性質 [1-8⁵]

1.2 区別

1.2.1 相

1.2.1.1 自性の相 [9-11]

1.2.1.2 影像の相 [12-14]

1.2.2⁶ 名称と分別の区別

1.2.2.1 名称の区別 [15-17]

1.2.2.2 分別の区別 [18-22]

1.2.3 有無の区別 [23-28]

1.2.4 一異の区別 [29-42]

1.2.5 二諦の分別 [43-46]

1.2.6 適時の法の言葉の解説 [47-50]

2 三性の解説

2.1 簡略に説いたもの [51-59]

2.2 詳細な解説⁷

2.2.1 聖教による論証

2.2.1.1 Maitreya の聖教 [60-83 = MSA 11. 38-41, MV 1. 5, 3. 3]

4 ただし前稿で指摘したように、注釈書には各項目の詳細や見出し番号を欠いている部分もあり、科文などの分類は筆者の解釈が含まれている。それ故に、ターラナタから注釈者、そして本稿筆者と二段階の解釈が加わったものであり、あくまでも内容解析の一事例を提示するにすぎない。

5 この番号は、テキストをパーダで数えたものである（ただし偈を外れた引用の導入部分を数えていない）。第3章までのテキスト校訂では、偶頗で数えていたのだが、4パーダで区切れないものが多くあるため、前章の研究よりパーダで数えることにした。

6 注釈書において、五事のうち区別の項目があげられているのは最初の三事のみであり、残りの二事の区別の語はみられない。代わりに、第3番目から第6番目までの見出し語があり、そこでは五事が主題別に解説されている。

7 注釈は「四つの項目」とするものの各項目をあげておらず、以下の解において第二の「区別」は確認できるものの、第三と第四の数字を確認できないので、2.2.3と2.2.4および2.3は推定でしかない。

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第 5 章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）

2.2.1.2 Nāgārjuna の聖教 [84-89 = *Śālistambakakārikā* 61cd-62]

2.2.1.3 Vasubandhu の聖教 [90-97 *Triṃśikākārikā* 20-21]

2.2.2 区別

2.2.2.1 自体の区別

2.2.2.1.1 遍計所執性 [98-104]

2.2.2.1.2 依他起性 [105-109]

2.2.2.1.3 円成実性 [110-115 = MS 2. 27, MV 3. 11cd, 116-119]

2.2.2.2 補足 [120-132]

2.2.2.2.1 円成実性 [133-143, 144-147 = LAS 2. 186]

2.2.2.2.2 遍計所執性 [148-151 = MSA 11. 17, 152-160]

2.2.2.2.3 依他起性 [161-171]

2.2.3 三性の有無の区別 [172-179]

2.2.4 特徴の基盤に入る在り方 [180-195]

2.3 意味をまとめたもの [196-199 = MSA 14. 34, 200-211 = MS]

3 縁起の解説

3.1 結合の在り方の略説 [212-215]

3.2 縁起の区別の詳細な解説

3.2.1 縁起の原語 [216-219]

3.2.2 縁起の区別

3.2.2.1 三の区別

3.2.2.1.1 本質の区別 [220-221]

3.2.2.1.2 美しいものと美しくないものとの区別 [222]

3.2.2.1.3 領受をとまなう縁起 [223]

3.2.2.2 八の区別 [224-231]

3.2.2.3 十二の区別

3.2.2.3.1 四相の区別の解説 [232-234]

3.2.2.3.1.1 一時的な縁起 [235-236]

3.2.2.3.1.1.1 二生における十二支縁起 [237-240]

3.2.2.3.1.1.2 三生における十二支縁起 [241-244]

3.2.2.3.1.2 刹那の十二支縁起 [245]

3.2.2.3.1.3 関係をもつ十二支縁起 [246-248]

3.2.2.3.2 十二縁起の詳細な解説

3.2.2.3.2.1 一般的在り方の解説⁸

3.2.2.3.2.2 典籍の意味

3.2.2.3.2.2.1 Maitreya の *Madhyāntavibhāga* [249-256 = MV 1. 10-11]

3.2.2.3.2.2.2 Vasubandhu の *Pratītyasamutpādayākhyā* [257-276]

3.2.2.4 縁起の意味のまとめ⁹ [277-280]

3.2.3 縁起の真実

3.2.3.1 無我の真実性 [281-284]

3.2.3.2 内部の真実性 [285-301]

3.2.3.3 無自性の真実性 [302-321]

4 因縁の設定

4.1 因縁の設定自体

4.1.1 まとめて説いたもの [322]

4.1.2 詳細な解説

4.1.2.1 六因の解説 [323-353]

4.1.2.2 四縁の解説 [354-365]

4.1.2.3 五果の解説 [366-373]

4.2 依存関係の意味の考察 [374-382]

8 十二支縁起の各項目の解説部分であるが、この項目に相当する本偈は存在しない。

9 注釈書では、シノプシスの項目として設定されていないが、ここに設ける。

第5章の内容

これらの解析に基づいて内容を簡略にまとめると次のようになる。

1 五法については、1.1 五法の性質について、相は言説一般、名称は名前、分別は心心所、真如は聖者の知の行境、真実知は三昧と後得と略説され [1-8]、続いて1.2 区別が述べられる。ただし、五事の区別は、1.2.1 相が自性と影像¹⁰に [9-14]、1.2.2 名称が六種に [15-17]、分別が三種に [18-22] 区別されるものの、その後は1.2.3 有無の区別 [23-28]、1.2.4 一異の区別 [29-42]、1.2.5 二諦の分別¹¹ [43-46] と、五事の各項目の細分化ではなく、主題により五事を区別する内容となり、1.2.6 法の言葉の解説 [47-50] として五事が結ばれている。

2 三性説は、2.1 簡略に言説により名付けられた遍計所執性と因縁から生じた識別の依他起性と道理を成立させる円成実性として述べられ [51-59]、2.2 詳細な解説では、2.2.1 教証として Maitreya の *Mahāyānasūtrālaṃkāra* と *Madhyāntavibhāga* [60-83]、Nāgārjuna の *Śālistambakakārikā* [84-89]、Vasubandhu の *Triṃśikākārikā* が引用される。2.2.2 区別は、2.2.2.1 三性そのものの区別とその補足が説明される。2.2.2.1 三性自体については、遍計所執性は我と所取・能取と相依の三分、名付けられる基盤と名付ける分別との二分に [98-104]、依他起性は雑染と清浄の二分 [105-109]、円成実性は *Mahāyānasamgraha* と、*Madhyāntavibhāga* V 3. 11cd が引用され [110-115]、無変化と不顛倒に二分される [116-119]。2.2.2.2 補足としてはその区別された三性は異なるものではなく、遍計所執性は名付けられた部分であり、依他起性は名付ける対象であり、円成実性はそれぞれの法性などとされる [120-132]。続

10 注釈書は、ここで Candrakīrti の *Madhyamakāvatāra* 6. 125a-c を引用する。Cf. de la Vallée Poussin 1977, p. 243, 小川1976, p. 262.

11 *Yogācārabhūmi*, Tib. P. 111, 61, 4.7-5.4; Chin. Vol. 30 p. 696b.

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第 5 章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）

く 2.2.2.2 区別の異門については、円成実性は自性と清浄に区別され、それぞれ滅諦と道諦と設定され [133-143]、*Lankāvatārasūtra* 2. 186 が引用される [144-147]。2.2.2.2.2 遍計所執性については、10 の分別を説く *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 11. 17 を引用し [148-151]、その根本はアーラヤ識とする¹² [152-160]。2.2.2.2.3 依他起性については、11 識¹³に基づいて説明されている [161-171]。最後に、2.2.3 三性の有無の区別が湖面に映る太陽等の喩例により [172-179]、2.2.4 特徴の基盤に入る在り方が瓶の顕現の喩例により述べられ [180-195]、2.3 意味のまとめ¹⁴として、Maitreya の *Madhyāntavibhāga*¹⁵ [196-200]、Asaṅga の *Mahāyānasamgraha* [201-211] が引用される。

3 縁起の解説について、3.1 結合の在り方の略説は、三性説との関係を述べたものであり、遍計所執性と依他起性が縁起であり、その関係が起こされるものと起こすもの、設定されるものと設定するものとされる [212-215]。3.2 詳細な解説は、3.2.1 縁起の原語 [216-219] から始まり、3.2.2 縁起の三種類の区別が続く。3.2.2.1 三種の区別は三乗によるものであり、3.2.2.1.1 本質の区別として菩薩たちに対して説かれたアーラヤ識から変化したもの [220-221]、二乗の者に対して説かれた美しいものと美しくないものとの区別としての十二縁起 [222]、3.2.2.1.3 声聞たちに対して説かれた領受をとまなう縁起で六識の生滅によるものである [223]。3.2.2.2 八種の区別 [224-231] は、領受による識が生じる縁起、死生の雑染の縁起、収獲物に例えられる外の縁起、生住滅として顕現する器世間の縁起、四食による縁起¹⁶、業により導かれる善趣と悪

12 *Mahāyānasamgraha* 2. 20. 長尾1982, pp. 342-346.

13 *Mahāyānasamgraha* 2. 2に説かれる11種の表象で、(1) 身体、(2) 有身、(3) 食者、(4) 享受対象、(5) 識、(6) 時、(7) 数、(8) 場所、(9) 単語、(10) 自他の区別、(11) 趣とである。長尾1982, pp. 275-281, 竹村1995, pp. 79-81を参照。

14 ただし、注釈書には「まとめの意味」の項目は見当たらず、三性を三空性と設定することとして引用文の解説が始まっているだけである。以下に項目設定のない、「3.2.2.4 縁起の意味のまとめ」が存在することから、混乱が生じている可能性がある。

15 注釈書は、「三空性」の典拠として『五百頌般若経』を引用する。

16 注釈書は、*Abhidharmakośakārikā* 3. 39-40ab を引用する。四食から始まる縁起支については、平川1988, pp. 409-410を参照。

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第5章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）

趣の区別の縁起、五道による浄化の区別の縁起、六神通のどの威力の区別の縁起¹⁷とである。3.2.2.3 十二支縁起の区別については、3.2.2.3.1 四相の区別として、刹那、関係をもつもの、一時的なものの、相続を断じるものであり、後の二項は異門とされ、本偈では三相とされる [232-234]。各項目の説明は順序が入れ替わり、3.2.2.3.1.1 一時的な縁起 [235-236] は、3.2.2.3.1.1.1 欲界の二生における十二支縁起 [237-240] と3.2.2.3.1.1.2 欲界の三生における十二支縁起 [241-246] との十二支を転生の回数により分類されている¹⁸。3.2.2.3.1.2 刹那の十二支縁起 [245] は行為を完成させることであり、注釈書は殺生により説明し、3.2.2.3.1.3 関係をもつ十二支縁起 [246-248] は、因果関係により説明されている。3.2.2.3.2 十二縁起の詳細な解説のうち、3.2.2.3.2.1 一般的在り方の解説は十二支縁起の各項目に対する解説部分であるが、注釈書のみにより言及されるものであり、対応する本偈は存在しない。3.2.2.3.2.2 典籍の意味として、3.2.2.3.2.2.1 Maitreya の *Madhyāntavibhāga* [249-256]、3.2.2.3.2.2.2 Vasubandhu の *Pratītyasamutpādayākyā* [257-276] が引用され、縁起の意味がまとめられている [277-280]。3.2.3 縁起の真実性については、3.2.3.1 無我の真実性 [281-284] を注釈書は無常・苦・空・無我により解説し、3.2.3.2 内部の真実性 [285-301] を、客塵なもの、煩惱の顕現によるもの、微塵の識別によるもの、根の識別によるもの、生じた識別によるものとの五項目により解説し、3.2.3.3 無自性の真実性 [302-321] を二諦説に基づいて解説する¹⁹。

4 因縁の設定のうち、4.1 因縁の設定そのものについて、4.1.1 まとめて説いたものを六因・四縁・五果²⁰とし [322]、4.1.2 詳細な解説を、4.1.2.1 六因

17 注釈書は、*Mahāyānasūtrālamkāra* 7. 1を引用する。

18 注釈書は、ここでそれぞれ *Abhidharmakośakārikā* 3. 37と3. 20cd を引用する。

19 注釈書は、*Abhidharmasamuccaya* に説かれる、自・他・両者・無因からの自性不成立としての縁起の甚深な意味に言及し、これにより Asaṅga の縁起観は Nāgārjuna のものと相違しないと主張する。またタントラ文献の縁起観として、*Nāmasaṃgiti* を引用する。Cf. 早島2003, pp. 234-235.

20 注釈書は、六因については *Abhidharmakośakārikā* 2. 49を、四縁については *Mūlamadhyamakakārikā* 1. 2abc を引用する。

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第 5 章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）の解説の各項目の異門 [323-326] を並べた後に、相応因 [327-329]、俱有因 [330-336]、遍行因 [337-339]、随順因 [340-341]、異熟因 [342-343]、能作因 [344-352] が解説される。このうち最後のものは実例が列挙され、注釈書は *Abhidharmasamuccaya* の 20 の区別に言及する²¹。4.1.2.2 四縁は、因縁 [353-355]、所縁縁 [356-357]、増上縁 [358]、等無間縁 [359-365] と解説され、ここでも増上縁について注釈書は *Abhidharmasamuccaya* の 4 の区別に言及する²²。4.1.2.3 五果は、離繫果 [366-368]、増上果 [369]、士用果 [370]、等流果 [371] において述べられ、すべての原因を二種とし [372-372]、注釈書は *Abhidharmasamuccaya* を引用する。4.2 依存関係の意味の考察 [373-382] においては、縁起の成立条件が述べられている。

まとめ

本章においては、五事・三性・縁起がそれぞれ密接に関係するものとして説かれている。いずれもが瑜伽行唯識派の基本的な教義であり、それらが大中観の立場で論じられている。すなわち、第 3 章において如来蔵思想を説いた Nāgārjuna に帰される文献が必要であったのと同様に、本章においても三性説を説く彼の文献が必要となるのである。それが彼に帰される *Śālistambakakārikā* であり、Tāranātha はここにおいても三性説が説かれるが故にその著者を疑うというのではなく、それを自らの学説に積極的に利用することを試みている。

縁起説については、Nāgārjuna の *Mūlamadhyamakakārikā* に説かれる相依性、あるいはそれにより無自性を論証するよりも、十二因縁による存在論を説くものとして解説されている。それがアビダルマの六因・四縁・五果に展開したのも必然であるように思える。ただし *Mūlamadhyamakakārikā* の第 1 章

21 早島2003, pp. 246-249.

22 早島2003, pp. 276-277. ただしここでは 9 項目があげられている。

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第 5 章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）

における四縁の否定については、都合が悪いのか、言及されていない。

以上のことから、本章においては瑜伽行唯識派の三性説・縁起説が説かれており、それを中観も許容するものであるという論理で大中観の学説が展開している。またそのような論法は前章と同様である。

dBu ma theg mchog 第 5 章和訳

大乘²³において五法が説かれていることに関して、声と意の動きの自性である言説の場所の一般が相である。そこで名前の一般的語が名称と述べられている。[1-4]

心と心所の諸法が分別である。真如は言説の領域を越え、聖者の知恵だけの行境である。真実知は三昧と後得の二つである。[5-8]

習気が顕現する種々なる影像の特徴と遍計されたものが「相」と言われ、自性と影像が相である。[9-11]

分別と無分別、明瞭と不明瞭から特徴をもつものと特徴をもたないものとの二つとして認められる。そのように五法自身の区別により五つである。[12-14]

事物の名称と、そのように関係する名称と、まとめたものと、異なるものと、知られているものと、知られていないものとで、名称の区別を六つにまとめていないものはない。[15-17]

分別の区別は無限でも、特徴から生じたものと特徴がない分別や、煩惱をとまなうものと煩惱をとまなわないものや、境に入るものと求めるものと、それぞれを考察する三つの分別にまとめられる。[18-22]

分別と知恵は実体として存在し、名称は名付けられることが存在し、相もだいたい同じである。真如は勝義において存在するものである。後の二

23 注釈書は大乘經典として、*Laṅkāvatārasūtra* と *Ghanavyūhasūtra* に言及する。前者の五法説については、菅沼1970, 1971を参照。

つは勝義諦で、相応する勝義のみに存在し、他の三つは世俗のみに存在するものとして成立する。[23-28]

名称と相は同一なもので、異なるものではない。真如と四法も「別なもの」と述べられることはない。分別の行境の特徴が相であり、名称の言説は存在することの特徴である。[29-32]

相を境に作るものが分別である。後の二つも境と境をもつものの特徴とする。相の大部分と名称は遍計であり、分別と智は依他起性をもつ。真如は変化のない円成実である。[33-37]

相は設定された四諦の部分で、名称は苦諦のみによりまとめられ、滅諦以外の三つによるものが分別で、設定されない四諦によるものが真如で、すべてを把握する道諦が真実智である。[38-42]

所取と能取は「それぞれ名称と相の」二つと「分別と真実智の」二つと、勝義の「真如」一つである。最初の二つは世俗のみであり、第三は世俗諦自身と解説される。最後の二つは勝義の事物の異門である。[43-46]

「法」と言う意味は法を理解することで、「[五] 事」とも言われており、特徴の基体や、所依のすべての所知もこの五つで、「五法」と名付けられている。[47-50]

すべての特徴の基体に三性が入っている。すなわち、言説により名付けられた設定された部分の遍計で、自らの因縁から生じた識別が依他起で、道理を最初に成立させたものが円成実である。[51-54]

普く設定する意識が分別で、他のものが習気で、その力からアーラヤ[識]が識別をともなって顕現する。最初の意味は法性のみで、関係する在り方によりすべてに開かれるであろう。[55-59]

尊者による偈頌が、

例えば言説の通りの意味と想の相と、その習気と、それからの顕現するものが遍計性である。[60-63 = MSA 11. 38]

名称と意味の通りに意味と名称として顕現するものは真実ではなく、分別と相が遍計性である。[64-67 = MSA 11. 39]

三種と三種の顕現をもつものが、能取と所取の特徴で、真実ではない分別が依他起性である。[68-71 = MSA 11. 40]

無と有であるものと、有と無との平等性と、不寂靜と寂靜と無分別が円成実性である²⁴。[72-75 = MSA 11. 41]

「遍計と依他起と円成実性でもある。対象であるから、非真実の分別であるから、二つのものが存在しないから」と解説されている²⁵。

[76-79 = MV 1. 5]

本質は三種で、常に存在しないものと、存在するが真実ではないものと、存在と非存在が真実であるものとで、本質は三種と認められる²⁶。[80-83 = MV 3. 3]

ナーガールジュナも『稲竿經注』に、

外の行為となす原因、それは仮設された自体である。

そのように依他が内の五識を生じさせる。仮設されたものではないので勝義が円成実と認められている²⁷。[84-89]

軌範師ヴァスバンドゥにより『唯識三十頌』に解説される。

それぞれの分別によりそれぞれの事物が考察される。それが遍計の本質であり、それは存在しない。[90-93]

依他起の本質は分別で、縁から生じたものである。円成実はそのに先行する。常に無となるものである²⁸。[94-97]

その遍計は三種である。すなわち、特徴の断と異門と相依とである。我

24 宇井1961, pp. 220-222.

25 長尾1976, p. 224.

26 長尾1976, pp. 266-267.

27 長谷川1984, pp. 15-16; 同1991, pp. 83-85.

28 荒牧1976, pp. 158-162.

と、所取・能取と、東西などのように。[98-100]

名付けられるすべての基盤を分別する相と、名付ける分別の区別としても認められ、本質と特殊の遍計の二つであり、名付けるものの区別により無限に区別される。[101-104]

種子の依他起と雑染と、清浄の本質として成立していない依他起とである。また不浄と浄の二つの世間の二つである。『入楞伽經』に六種の区別が説かれている²⁹。十一の識別³⁰はこの区別になる。[105-109]

聖者〔アサンガ〕により〔『撰大乘論』に〕説かれている。

その清浄は、自性と無垢と道と所縁である。清浄なる諸法は四種にまとめられている³¹。[110-113]

尊者〔マイトレーヤ〕によっても〔『中辺分別論』に〕、

変化がないことと不顛倒であることで、円成実は二種である³²。

[114-115 = MV 3. 11cd]

最初の二つは、ある場合にそこに行く人の様相による区別の一つの本質であり、後の二つは随順するものと認められる。依他起そのものの場合も、その対治となる。[116-119]

その三性自身は異なるものではない。遍計は名付けられた部分であり、依他起は名付ける対象であり、円成実はそれぞれの法性である。法をもつものと法性との在り方で存在し、有と無により一であることは否定されるので、二つと円成実とは一でも異でもない。[120-125]

考察するならば、依他起は遍計にまとめられるので、二性になっている。依他起の顕現部分は遍計で、迷乱の顕現は不可思議である。[126-129]

顕現の基体の心も一切種子で、それぞれの法性に至るそれもそうである。

29 *Laṅkāvatārasūtra* 2. 195 (= 10. 309). 安井1976, p. 118.

30 *Mahāyānasamgraha* 2.2. 長尾1982, pp. 275-277.

31 長尾1982, p. 364.

32 長尾1976, p. 277.

遍計は存在しないので、所取と能取の戲論を離れている。[130-132]

九つの円成実と16空³³と自性の円成実と清浄な円成実とが、滅と道の区別により明らかに設定されている。[133-135]

まず依他起は顕現部分を離れず、それが存在すればそれがあり、それが滅すればそれも滅する。水晶の青を打ち負かすことで水晶が滅するように、その時に法性だけが残るにすぎない。[136-139]

対象に顕現する部分とは異なる顕現は存在しない。依他起においては自性の堅固性が離れており、その自性の在り方で円成実が存在しており、相であるものは遍計の在り方である。[140-143]

経典 [『入楞伽經』] にも、

遍計のこの事物が依他起であることも真実で、遍計の種々なる顕現が「依他起」と考察される³⁴。[144-147 = LAS 2. 186 = 10. 298]

尊者 [マイトレーヤ] により [『大乘莊嚴經論』に] 解説されている。

勝者の子たちにより、無と有、増益と損減の分別、一と異、同一性と差別の分別、名称と意味のようなものに執着する分別は正しく捨てられるべきである³⁵。[148-151 = MSA 11. 77]

その十が散乱させる分別で、根本の分別はアーラヤ識である³⁶。特徴と特徴の顕現である所取と能取の識別が特徴になるもので、利益と損害と老などと楽苦などで、その二つを制御することで顕現するものが分別である。[152-156]

在り方ではない分別は非法を聞いてからで、在り方の通りによく説かれた法を聞くことに追隨する。両者も他者が説いた分別である。明らかな執着の分別は、昏沈した見解である。[157-160]

33 注釈書は、最初の二項目については「二諦の章において出てくる」とする。

34 安井1976, p. 117.

35 宇井1961, p. 250.

36 Cf. *Mahāyānasamgraha* 2. 20. 長尾1982, pp. 342-346.

身体と身体をもつものは識別と五根で、食者の意と、享受の六境と、享受に入るその識から、時と、数と、村などの境と、単語の識別が明らかに述べられる習気に変化し、[161-165]

自他の顕現の識別が我見から、善趣と悪趣の死と生の識別が存在する支分は種子から生じたものなので、すべてが識別そのものである。識別のみが顕現し、領受されることで成立している。それ故に世俗諦の在り方として存在する。[166-171]

例えば清浄な湖に太陽と月などの影像の多くの相が現れるならば、それと水に区別はないけれども、水は存在するが、影像は存在しない顕現のように。[172-175]

影像と同じものが遍計の法であり、唯識が水と同じで、世俗諦自身に関してである。勝義においてそれらはいかなるものも存在しない。[176-179]

瓶として顕現する時に、瓶の部分は遍計自身であり、識の顕現のみが依他起で、その二つは迷乱である。それぞれの後の知恵が円成実である。[180-183]

食欲と瞋恚の顕現部分と、その識別と、その等しい味の戲論を離れたものが三〔性〕で、道性は依他起で、その分別と法性の把握が他の二つと知られる。[184-187]

声と分別の顕現の法身は遍計で、その相を把握する心は依他起で、それに似た自体が円成実であり、この識別がすべての所知に合わされるべきである。[188-191]

しかも言葉を混ぜることにより得られるものは無限に述べられるような大過失の設定は捨てられ、それ故にすべての特徴の基体に合わされる³⁷。[192-195]

尊者によっても、

非存在の空性を知り、同じように存在の空性と自性の空性を知れば、
「空性を知る」と言われる³⁸。[196-199 = MSA 14. 34]

聖者と軌範師によっても『摂大乘論』に、

例えば顕現はその通りに存在しない。それ故に「存在しない」と述べられている。何故ならばそのように顕現するならば、それ故に「存在する」と述べられている。[200-203]

自身と我そのものは存在しないので、自体として存在しないので、把握される通りにそれは存在しないので、本質そのものは存在しないものと認められている。[204-207]

本質そのものは三種であるが、本質そのものが存在しない三種に依ってから、一切諸法は無自性と説かれている³⁹。[208-211]

遍計と依他起は縁起そのものと述べられている。それは二つで、起こされるものと起こすものと、設定されるものと設定するものに関する縁起である。最初のものは依他起で、二番目が遍計である。[212-215]

縁起の意味は、結合してから生じることで、「積集に依ってから置かれ、生じた」と言われる。また前のものに依って後のものに関係する。これは起こされるものと起こすもののみで、[216-219]

本質を区別する縁起はすべての法がアーラヤ識から変化したものである。美しいものと美しくないものとを区別するものが十二であり、領受をとまなうものが六つの積集に入る在り方である。[220-223]

識が生じることと、死と生と、収穫物などの外の区別と、消滅と破壊などの器の縁起と、四食により養うことと⁴⁰、行くことの二相として、[224-227]

37 この偈は先行する偈と異なり7音節からなるため、本偈ではない可能性がある。

38 宇井1961, p. 306.

39 長尾1982, p. 383.

40 注釈書は *Abhidharmakośakārikā* 3. 39-40ab を引用する。Cf. 山口1955, pp. 322-324.

業により導かれる望むものと望まないものとの行くこととである。浄化の区別は五道により解脱を成立させることである。威力の区別は神通などで⁴¹、この八つも関係をともなう縁起である。[228-231]

死と生の十二支であり、そこでも刹那と、関係をもつものと、一時的で相続を断じるものとの三つとして認められる。一時的なものも生は二つと三つである。[232-234]

縁起をそれぞれ完成する在り方はそれぞれで、捨と成の四つをともなう一度の因果は、この二度の生で、他のものはこれと交わらない。種子を植えることと育てることの分別のために説かれているのが、三世において完成する二度の因果である⁴²。[235-240]

捨と成に区別なく交わって、三種の愚かさを退ける⁴³ためにこれも説かれており、一世でも完成がある。順序が乱れたならば、支を完成することに矛盾する。[241-244]

刹那の一つの刹那において円満で、関係をもつものもそれに似た相続と認められている。またそれぞれの支が刹那において、次第に結合するという解説も適切に明らかである。[245-248]

尊者によっても説かれている。

妨げられるから、植えるから、導くから、普く取るから、完成させるから、三つの断があるから、享受するから、集めるから、[249-252 = MV 1. 10]]

結合するから、明らかになるから、苦であるから、有情は煩惱を[作る]。三種、二種も雑染で、七種⁴⁴は非真実の分別から⁴⁵。[253-256 = MV 1. 11]

41 注釈書は *Mahāyānasūtrālamkāra* 7. 1を引用する。Cf. 宇井1961, p. 112.

42 注釈書は *Abhidharmakośakārikā* 3. 37を引用する。Cf. 山口1955, p. 314.

43 注釈書は *Abhidharmakośakārikā* 3. 20ab を引用する。Cf. 山口1955, p. 155.

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第5章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）

規範師 [ヴァスバンドゥ] によっても『縁起経釈⁴⁶』に] 解説される。

何により、どのように、何が引かれ、それを成立させても、そこでも苦悩であるものが十二支により説かれている。[257-260]

二支により、一により、四種と二により、一により、一により、一により、七義として明らかに説かれている。[261-264]

諦を如実に知らないで、業により心に薫習されるので、四支が次第に引かれてその種子が成長するので、[265-268]

引かれた通りの生の受により生じた愛から取が生じるので、その業の薫習が明らかになり、[269-272]

成立したものが生であり、それにも老などが苦悩である。何故ならば諦を見れば引かれることなく⁴⁷、愛を離れれば、生じることはないから⁴⁸。[273-276]

そこで因縁の区別をまとめたものだけを知れば、縁起の意味を確実に得るであろう。何故ならば不動と無常の力をもってから、諸事物の生滅をなすから。[277-280]

作者の慧と主などの常と時などの無力な相応しない原因が捨てられるので、勝者による因縁果の区別と、縁起の多くの相が明らかに説かれている。[281-284]

一切の縁起は人工的な客塵のものである。煙の識別と火の知覚から生じたものと、煩惱の顕現により業の識別を起こしたものが、それから生じた

44 注釈によると、無明と愛と取の三つが煩惱の雑染で、行と有の二つが業の雑染で、残りの七つが生雑染であるとし、*Abhidharmakośakārikā* 3. 26 ab と Nāgārjuna の *Pratītyasamutpādayakārikā* 2abc を引用する。Cf. 山口1955, p. 177, 瓜生津1974, p. 357, 梶山2010, p. 182.

45 長尾1976, pp. 228-230.

46 松田 pp. 45-46.

47 注釈書は *Abhidharmakośakārikā* 5. 44ab を引用する。Cf. 小谷2007, p. 199.

48 注釈書は、「ここで生が苦で、愛と言われるものが広大な集で、滅が解脱で、その道を得ることが八聖道である」と言うナーガールジュナの偈を引用する。

識別を起こすのである。[285-288]

微細の識別から粗大の顕現が生じ、根の識別と色の識別と意の動きから識の生起などである。[289-291]

生じるその識別から生が識別され、存在するその識別から滅の識別が、それから滅したという顕現が識別される。三時の顕現も真実の事物として存在しない。[292-295]

習気の一つ育てたそれから顕現が生じ、その顕現も一つの習気を育む。種子を育むことと識別の二相が相互にそれぞれ助長して、育成と識別が連続して生じる。これらは世俗の場所の究極の方便である。[296-301]

その識別も夢の認識のように、最初から存在すると領受されなくても、顕現が減しない。夢の火からの燃焼として顕現するように、有と無、常と断をすべて越えている。[302-305]

それが勝義に入る在り方であるが、世俗諦の次第の一つと認められる。勝義において縁起は決して存在しない。そこでは因果と設定とを離れている。[306-309]

縁起であるから、無我を識別するから、法無我到明らかに入っている。蘊の相続とアーラヤ識に我と衆生が法として誤って生じる。[310-313]

それらの縁起は世俗の縁起で、それぞれの識別は無我で、勝義に入り、それに似た法界はそれぞれの顕現の影像をもつそれは勝義のみの縁起である。[314-317]

それに似た縁起は法性で、その勝義の依って生じるものではない。何れからも生じず、依存せず、変化せず、戲論を離れ、常住であるから。[318-321]

「六因と四縁と五果」と知られており、能作因と自性因であり、俱有は助伴で、随順が相応因で、増長が同類であり、遍行が障碍で、異熟が適合妥当である。[322-326]

相応〔因〕は心と心所の原因で、所縁と境と相が一つであるものがそれであるので⁴⁹、必要の力であり、俱有にまとめられている。[327-329]

これに内外の二つがあり、特徴そのものと特徴の基体とが、心と心所などの如くである⁵⁰。それも地の微細の最初の刹那のそれが水火風の三つの第二の俱有因である。[330-333]

そのように相互にそれぞれ合わされるべきである。しかも事物である結果が事物である原因を妨げることはできない。同時に生じる場合の顕現もそうである。[334-336]

遍行は煩惱から煩惱が生じ⁵¹、項目である種と地などは確定せず、これも同類の中にほとんど収められている。それは随順因で、善などから善が、地に類似したものから⁵²類似したものが起こされると認められる。[337-341]

随順しないで善と不善から無記が生じることになるそれは異熟因である⁵³。能作因は効力なしに成立するものではないので、行為をともなうものが能作因である。[342-345]

結果が生じ、育て、依存され、存在し、変化し、関係し、作り、証因で、結果を得て、投げ、成立させ、中断させ、古くし、消滅させ、確定させ、不確定させるなど⁵⁴で、まとめればすべての因が能作因であっても、人による行為が別に前のものから区別されている。[346-352]

すべての因縁はアーヤ識で、俱有などの五因が因と認められる。近取因は確実にここでは認められる。[353-355]

残りは俱有縁である。所縁縁は見るものと知覚対象であって、「増上」

49 Cf. *Abhidharmakośa* 2. 53cd. 桜部1969, pp. 368-369.

50 Cf. *Abhidharmakośa* 2. 50cd. 桜部1969, p. 355.

51 Cf. *Abhidharmakośa* 2. 54ab. 桜部1969, pp. 370-371.

52 Cf. *Abhidharmakośa* 2. 52a. 桜部1969, pp. 359-360.

53 Cf. *Abhidharmakośa* 2. 54cd. 桜部1969, p. 371.

54 Cf. *Abhidharmasamuccaya*, 早島2003, pp. 346-349.

と言われるものは所依で、能作因にまとめられる⁵⁵。[356-358]

等無間縁は自らと同じ原因に一つの直後のものと認められ、これと所縁縁は把握する法としてであり、他には縁は二つである。[359-361]

等無間縁は機会を開く行為をもち、或は境に向かうと認められ、前の如くならば、色などにも存在することになり、把握する部分すべてにも縁の基本⁵⁶として確定しない。[362-365]

存在するものに関して、離繫を起こす原因は存在しない。考察された滅が離繫果そのものであり、世俗である。勝義は離繫そのものであり、結果と名付けられる。増上果は境であり、異熟は相続によりまとめられている。[366-369]

所作の原因の門から生じたものが士用果で、等流果は「同類因」と言われる。第一のものと述べられるものにより一辺のみではない。すべての因は確実に二つにまとめられる⁵⁷。[370-373]

原因から生じたならば、それに依ることになる。設定されるものは相互に依存するので、設定されるものが滅して、それだけから本質が依存することは成立しない。二つの山はお互い〔の本質〕に依存することがないように。[374-378]

「右の設定をなすものは左である」と言われ、右の設定は左の設定に依ることになるが、事物に依るのではない。それ故に関係の第一のものが起こされるものと述べられている。[379-382]

と言う「五法と三性と縁起を決定する」第五章。

55 Cf. *Abhidharmakośa* 2. 62d. 桜部1969, p. 397.

56 Tib. gzhi. 注釈書は「四縁 (rkyen bzhi)」と読む。

57 注釈書は、雑染の原因であるアーヤ識周辺のすべての習気をもつものと、浄化の原因である無漏の種子とする。

***dBu ma theg mchog* 第5章チベット語テキスト**

theg pa chen por chos lnga bstan pa ni //
(D. 13a) sgra dang yid kyi⁵⁸ g-yo ba'i rang (M. 36) bzhin gyi //
brjod pa'i gnas kyi spyi ni rgyu mtshan te //
de la bla dwags tshig spyi ming du brjod //
sems dang sems byung chos rnam rnam rtog yin // 5
de bzhin nyid ni brjod (L. 19a) pa'i yul las 'das //
'phags pa'i ye shes kho na'i spyod yul lo //
yang dag shes pa mnyam bzhag⁵⁹ rjes thob gnyis //
bag chags snang brnyan sna tshogs mtshan ma dang //
kun brtags gang yin rgyu mtshan zhes⁶⁰ bya ste // 10
rang bzhin dang ni gzugs brnyan rgyu mtshan no //
rtogs⁶¹ dang ma rtogs⁶² gsal dang mi gsal las //
mtshan bcas mtshan med rgyu mtshan gnyis su 'dod //
de bzhin chos lnga nyid kyi dbye bas lnga //
dngos po'i ming dang de bzhin 'brel ba'i ming // 15
bsdus dang tha dad grags dang ma grags te //
ming gi dbye ba drug tu⁶³ ma 'dus med //
rnam par rtog pa'i dbye ba mtha' yas kyang //
mtshan las byung dang mtshan med rnam rtog gam //
nyon mongs can dang nyon mongs can min nam // 20

58 L: *kyis*.

59 L: *gzhag*.

60 L: *ces*.

61 M: *rtog*.

62 M: *rtog*.

63 D: *du*.

yul la 'jug dang tshol ba po dang ni //
 so sor rtog pa'i rnam rtog gsum du 'dus //
 rtog dang shes pa rdzas su yod pa ste //
 ming (B. 20) ni brtags yod rgyu mtshan phal cher yang //
 de bzhin nyid ni don dam yod pa nyid // 25
 phyi ma gnyis ni don dam bden pa dang //
 mthun pa'i don dam tsam du yod pa ste //
 gzhan gsum kun rdzob nyid du yod par grub //
 ming dang rgyu⁶⁴ mtshan de nyid gzhan (L. 19b) nyid min //
 de bzhin nyid dang chos bzhi'ang brjod du med // 30
 rnam rtog spyod yul mtshan nyid rgyu mtshan te //
 ming gi tha snyad gnas kyi mtshan nyid do //
 rgyu mtshan yul du byed pa rnam⁶⁵ rtog go /
 phyi ma gnyis kyang yul dang yul can mtshan //
 rgyu mtshan phal dang ming ni kun brtags yin // 35
 rtog dang shes pa gzhan dbang (M. 37) mtshan nyid can //
 de bzhin nyid ni 'gyur med yongs grub po //
 rgyu mtshan rnam bzhag⁶⁶ bden pa bzhi car la //
 ming ni sdug bsngal bden pa kho nas bsdus //
 'gog bden ma gtogs gsum gyis rnam rtog dang // 40
 rnam par ma bzhag⁶⁷ bden bzhis de bzhin nyid //
 (D. 13b) kun la dmigs pa'i lam bden yang dag shes //
 gzung 'dzin gnyis gnyis don dam gcig yin te //

64 D: *rgyal*.

65 L: *rnams*.

66 LM: *gzhag*.

67 M: *gzhag*.

dang po gnyis ni kun rdzob tsam yin la //
 gsum pa kun rdzob bden pa nyid du bshad // 45
 tha ma gnyis ni don dam dngos rnam grangs //
 chos zhes bya ba don chos go byed de⁶⁸ //
 dngos po zhes kyang bya ste mtshan gzhi'am⁶⁹ //
 rten gyi shes bya kun yang lnga po 'di //
 chos lnga zhes ni rab tu brtags pa yin // 50
 mtshan gzhi kun la mtshan nyid gsum 'jug ste //
 brjod pas brtags (L. 20a) pa'i brtags cha kun brtags dang //
 rang gi rgyu rkyen las skyes rnam rig gzhan //
 gnas lugs gdod mar grub pa yongs grub po //
 kun tu 'dogs byed yid shes rnam rtog ste // 55
 gzhan ni bag chags yin te de'i dbang las //
 kun gzhi rnam shes rnam rig bcas par snang //
 gdod ma'i don ni chos nyid kho na ste⁷⁰ //
 'brel ba'i tshul gyis kun la dbye bar 'gyur //

rje btsdun gyis tshogs su bcad pa //

ji ltar brjod don 'du shes kyi // 60
 rgyu mtshan dang⁷¹ de'i⁷² bag chags dang //
 de las kyang don snang ba ni //
 kun tu brtags pa'i mtshan nyid do //⁷³

68 M: *do*.

69 M: *gzhi 'am*.

70 L: *te*.

71 M *om*.

72 M: *de yi*.

73 *Mahāyānasūtrālamkāraśāstra* 11. 38 (Lévi 1907, p. 64):
 yathājālpārthasaṃjñāyā nimittaṃ tasya vāsanā //
 tasmād apy atha vikhyānaṃ parikalpitaśaṇaṃ //

ming dang don ni ji lta bar //
 don dang ming du snang ba gang // 65
 yang dag min rtog rgyu mtshan ni //
 kun tu brtags pa'i mtshan nyid do // ⁷⁴
 rnam gsum rnam gsum snang ba can //
 'dzin dang gzung ba'i ⁷⁵ mtshan nyid de //
 yang dag ma yin kun rtog ni // 70
 gzhan gyi dbang gi mtshan nyid do // ⁷⁶
 med dang yod nyid gang yin (M. 38) dang //
 yod dang med pa mnyam nyid dang //
 ma zhi zhi dang rnam mi rtog //
 yongs su grub pa'i mtshan nyid do // ⁷⁷ 75
 (B. 21) brtags pa dang ni gahzn dbang dang //
 yongs su grub pa nyid kyang ngo //
 don phyir (L. 20b) yang dag mi ⁷⁸ rtog phyir //
 gnyis po med pa'i phyir bshad do // ⁷⁹
 ngo bo nyid gsum rtag med dang // 80
 yod kyang kho na ma yin dang //

74 *Mahāyānasūtrālamkāra* 11. 39 (Lévi 1907, p. 64):
 yathānāmārtham arthasya nāmaṇ prakhyānatā ca yā /
 asaṃkalpanimittam hi parikalpita lakṣaṇam //

75 L: *ni*.

76 *Mahāyānasūtrālamkāra* 11. 40 (Lévi 1907, p. 64):
 trividhatrividhābhāso grāhyagrāhakalakṣaṇaḥ /
 abhūtaparikalpo hi paratantraśtha lakṣaṇam //

77 *Mahāyānasūtrālamkāra* 11. 41 (Lévi 1907, p. 65):
 abhāvabhāvatā yā ca bhāvābhāvasamānatā /
 aśāntaśāntā 'kalpā ca pariniṣpannalakṣaṇam //

78 LM: *min*.

79 *Madhyāntavibhāga* 1. 5 (Nagao 1964, p. 19):
 kalpitaḥ paratantraś ca pariniṣpanna eva ca /
 arthād abhūtakalpāc ca dvayābhāvāc ca deśitaḥ //

yod dang med de kho na ste //

ngo bo nyid ni gsum du 'dod // ⁸⁰

nā ga rdzu ⁸¹ nas kyang //

phyi yi las dang bya ba rgyud ⁸² //

de ni (D. 14a) brtags pa'i bdag nyid do // 85

de bzhin gzhan dbang nang gi ste //

rnam shes lnga po 'byung ba'o //

brtags bya min phyir don dam ni //

yongs su grub par 'dod pa yin // ⁸³

slob dpon gyis bshad pa /

rnam par rtog pa gang gang gis // 90

dngos po gang gang rnam brtags pa //

de ni kun tu brtags pa yi ⁸⁴ //

ngo bo nyid de de med do // ⁸⁵

gzhan gyi dbang gi ngo bo ni //

rnam rtog yin te rkyen las byung // 95

grub ni de la snga ma'o ⁸⁶ //

80 *Madhyāntavibhāgākārikā* 3. 3 (Nagao 1964, pp. 37-38):
svabhāvas trividhaḥ asac ca nityaṃ sac cāpy atatvataḥ /
sad-asat-tatvataś ceti svabhāva-traya iṣyate //

81 M: *gardzu*.

82 M: *rgyu*.

83 *Śālistambakārikā* 61cd-62 (Sonam Rabten 2004, p. 93. ただし偈の数え方が 1 パー
タ異なる).

84 L: *yin*.

85 *Trīṃśikārikā* 20 (Lévi p. 39; Buescher 2007, p. 148):
yena yena vikalpena yad yad vastu vikalpyate /
parikalpita evāsau svabhāvo na sa vidyate //

86 D: *ma lo*.

rtag tu med par gyur pa gang //⁸⁷
 kun brtags de ni rnam pa gsum yin te //
 mtshan nyid chad dang rnam grangs bltos⁸⁸ pa'o //
 bdag dang gzung⁸⁹ 'dzin shar nub la sogs bzhin // 100
 'dogs gzhi kun tu rtog⁹⁰ pa'i rgyu mtshan dang //
 'dogs byed rtog pa'i dbye bar yang 'dod de⁹¹ //
 ngo bo nyid dang khyad par kun brtags gnyis //
 'dogs byed dbye bas mtha' yas dbye bar 'gyur //
 sa bon gzhan dbang kun nas⁹² nyon mongs dang // 105
 (L. 21a) kun byang ngo bor ma grub gzhan⁹³ dbang ngo //
 yang na ma dag dag pa'i 'jig rten gnyis //
 lang gshegs mdo las tshogs drug dbye ba gsungs //
 rnam rig bcu gcig 'di yi dbye bar 'gyur //
 'phags pas gsungs pa /
 dag pa de ni rang bzhin dang // 110
 dri ma med dang lam dang dmigs //
 rnam par dag pa (M. 39) chos kyi rnam //
 rnam pa bzhi pos bsdu pa yin // ⁹⁴
 rje btsun gyis kyang /
 'gyur med phyin ci ma log pa //

87 *Triṃśikārikā* 21 (Lévi p. 39; Buescher 2007, p. 148):
 paratantrasvabhāvas tu vikalpaḥ pratyayodbhavaḥ /
 niṣpannas tasya pūrveṇa sadā rahitatā tu cā //

88 M: *ltos*.

89 D: *gzungs*.

90 D: *rtogs*.

91 LM: *do*.

92 L: *las*.

93 L: *gzhin*.

94 *Mahāyānasamgraha* 2. 27 (Lamotte 1973, p. 38).

yongs su grub pa rnam pa gnyis // ⁹⁵ 115
 dang po gnyis ni gang la der song ba'i //
 skyes bu'i ldog chas phye yi ngo bo gcig //
 phyi ma gnyis ni rjes mthun yin par 'dod //
 gzhan dbang nyid na'ang de yi gnyen por 'gyur //
 mtshan nyid gsum po de nyid gzhan nyid min // 120
 kun brtags brtags⁹⁶ cha gzhan dbang 'dogs⁹⁷ yul nyid //
 yongs su grub pa de de'i chos nyid yin //
 chos can chos nyid tshul du gnas pa dang //
 yod dang med pas (D. 14b) gcig pa bkag pa'i phyir //
 gnyis dang yongs grub gcig dang tha dad min // 125
 rnam par dpyad na gzhan dbang kun brtags su //
 'dus phyir mtshan nyid gnyis su 'gyur ba yin //
 gzhan dbang gi ni snang cha kun brtags te //
 (L. 21b) 'khrul ba'i⁹⁸ snang ba (B. 22) bgrang yas bsam mi khyab //
 snang gzhi'i sems kyang sa bon thams cad pa // 130
 de de'i chos nyid du song de yang de'o //
 kun brtags med phyir gzung 'dzin spros dang bral //
 yongs grub dgu dang stong nyid bcu drug dang //
 rang bzhin yongs grub rnam dag yongs grub ni //
 'gog dang lam gyi dbye bas rab tu bzhag⁹⁹ / 135
 re zhiḡ gzhan dbang snang cha ma bral ba //

95 *Madhyāntavibhāḡakārikā* 3. 11cd (Nagao 1964, p. 41):
 nirrvikārāviparyāsa-pariniṣpattito dvayaṃ //

96 M: *btags*.

97 M: *'dog*.

98 L: *pa'i*.

99 D: *gzhaḡ*.

de srid de yin de zhig de yang zhig /
 shel gyi sngon po bcom pas shel zhig ltar //
 de tshe chos nyid 'ba' zhig lus par¹⁰⁰ zad //
 don la snang cha las gzhan snang ba med // 140
 gzhan dbang la ni rang ngo'i tshugs thub bral //
 de yi rang bzhin tshul du yongs grub gnas //
 rnam pa gang yin kun brtags tshul yin no //

mdo las kyang /¹⁰¹

gang brtags pa yi dngos po 'di //
 gzhan gyi dbang yang de nyid de // 145
 brtags pa sna tshogs snang ba ni //
 (M. 40) gzhan gyi dbang zhes rtogs¹⁰² par byed //¹⁰³

rje btsun gyis¹⁰⁴ bshad pa /

rgyal ba'i sras rnam kyī¹⁰⁵ ni med dang yod pa dang //
 sgro 'dogs skur ba'i rtog dang gcig dang du ma nyid //
 rang dang khyad par rtog¹⁰⁶ dang ming don ji bzhin du¹⁰⁷ / 150
 mngon par zhen pa'i rtog pa yang dag spang par bya //¹⁰⁸
 de bcu rnam g-yeng rnam par rtog pa ste //

100 L: *pa*.

101 D: //.

102 L: *rtog*.

103 *Lankāvatārasūtra* 2. 186 = 10. 298 (Nanjio 1923, pp. 130-131):

yad etat kalpitam bhāvaṃ paratantram tad eva hi /
 kalpitam hi vicitrābhaṃ paratantre vikalpyate //

104 L: *gyi*.

105 LM: *kyis*.

106 DM: *rtogs*.

107 B: *du* / *la*.

108 *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 11. 77 (Lévi 1907, p. 76):

abhāvabhavādhyapavāḍakalpa ekatvanānāsvaviśeṣakalpāḥ /
 yathārthanāmābhiniवेशakalpāḥ jinātma jaiḥ samparivarjanīyāḥ //

(L. 22a) rtsa ba'i rnam rtog kun gzhi rnam par shes //
 mtshan ma mtshan snang gzung bya 'dzin byed rig /
 mtshan 'gyur phan gnod rga sogs bde sdug sogs // 155
 de gnyis bsdoms pas snang 'gyur rnam rtog yin //
 tshul min rnam rtog chos min thos las te //
 tshul bzhin legs gsungs¹⁰⁹ chos thos rjes su 'gro //
 gnyis ka'ang gzhan bstan rnam par rtog pa (D. 15a) yin //
 mngon zhen¹¹⁰ rnam rtog lta ba'i 'thibs po'o // 160
 lus dang lus can rnam rig dbang po lnga //
 za¹¹¹ po¹¹² yid dang nyer spyod yul drug dang //
 nyer spyod 'jug shes de nas dus dang grangs //
 grong¹¹³ sogs yul dang tha snyad rnam rig ni //
 mngon par brjod pa'i bag chags la 'gyur¹¹⁴ zhing // 165
 bdag gzhan snang ba'i rnam rig bdag lta las //
 mtho ris ngan 'gro 'chi 'pho skye ba yi //
 rnam rig srid¹¹⁵ pa'i yan lag sa bon las //
 byung phyir thams cad rnam par rig pa nyid //
 rnam rig tsam ni snang zhing myong bas grub // 170
 de phyir kun rdzob bden pa'i tshul la gnas //
 ji ltar dwangs pa'i¹¹⁶ chu mtshor nyi zla sogs //
 gzugs brnyan rnam pa du ma shar gyur na //

109 M: *gsung*.

110 M: *zhes*.

111 D: *sra*.

112 B: *bo*.

113 D: *grongs*.

114 LM: *las byung*.

115 D: *sred*.

116 DL: *dang ba'i*; M *dwangs pa*.

de dang chu la dbye ba med mod kyi //
 chu ni yod la gzugs brnyan med snang bzhin // 175
 gzugs brnyan dang mtshungs kun tu¹¹⁷ (L. 22b) brtags pa'i chos //
 rnam shes tsam ni chu (B. 23) dang mtshungs pa ste //
 kun rdzob bden pa nyid kyi dbang du byas //
 dam pa'i don du de dag gang yang med //
 bum par¹¹⁸ (M. 41) snang ba'i dus na bum pa'i cha // 180
 kun brtags nyid yin shes pa snang ba tsam //
 gzhan gyi dbang ste de gnyis 'khrul pa¹¹⁹ yin //
 de de'i shul gyi ye shes yongs grub po //
 chags sdang snang cha de yi rig pa dang //
 de yi ro mnyam spros bral gsum po de // 185
 lam nyid gzhan dbang de yi rtog¹²⁰ pa dang //
 chos nyid dmigs pa gzhan gnyis yin par shes //
 sgra rtog snang ba'i chos sku'ang kun brtags¹²¹ te //
 de yi rnam pa 'dzin pa'i sems gzhan dbang //
 de 'dra dngos ni yongs su grub pa ste // 190
 rig 'di shes bya kun la sbyar bar¹²² bya //
 'on kyang tshig la 'chol¹²³ ba yis //
 thob pa thug¹²⁴ med smra ba ltar //

117 L: *du*.

118 L: *pa*.

119 M: *ba*.

120 M: *rtogs*.

121 M: *btags*.

122 L: *ba*.

123 M: *'chel*.

124 D: *thub*.

ha cang thal ba'i rnam bzhag¹²⁵ spangs //

de phyir mtshan gzhi kun la sbyor // 195

rje btsun gyis kyang /¹²⁶

med pa'i stong pa (D. 15b) nyid shes shing //

de bzhin yod pa'i stong nyid dang //

rang bzhin stong pa nyid shes na //

stong nyid shes pa zhes brjod do //¹²⁷

'phags pa'i zhal snga nas dang / slob dpon gyis kyang /¹²⁸

ji ltar snang ba de ltar med // 200

(L. 23a) de phyir med ces¹²⁹ brjod par mdzad¹³⁰ //

gang phyir de ltar snang gyur pa //

de phyir yod ces¹³¹ brjod par mdzad¹³² //

rang dang bdag nyid med pa'i phyir //

rang gi dngos la mi gnas phyir // 205

gzung¹³³ ba bzhin du de med phyir //

ngo bo nyid med nyid du bzhed //

ngo bo nyid ni rnam gsum gyi //

ngo bo nyid med rnam gsum la //

brten¹³⁴ nas chos rnam thams cad ni // 210

125 L: *gzhaḡ*.

126 D: //.

127 *Mahāyānasūtrālamkāra* 14. 34 (Lévi 1907, p. 94):
 abhāvaśūnyatām jñātvā ca vimuktaḥ dr̥ṣṭihāyibhiḥ /
 prakṛtyā śūnyatām jñātvā śūnyajña itī kathyate //

128 D: //.

129 D: *zhes*.

130 D: *mdzod*.

131 D: *zhes*.

132 D: *mdzod*.

133 L: *bzung*.

134 L: *rtē*.

rang bzhin med par bstan pa yin //¹³⁵
 kun brtags gzhan dbang rten 'brel nyid du brjod //
 de ni gnyis te bskyed bya skyed byed dang //
 gzhang bya 'jog byed dbang byas rten 'byung ngo //
 dang po gzhan dbang gnyis pa kun brtags yin // 215
 rten 'brel don ni phrad¹³⁶ nas 'byung ba¹³⁷ (M. 42) ste //
 tshogs la bltos¹³⁸ nas bzhag gam byung zhes¹³⁹ pa'o //
 yang na snga ma la brten¹⁴⁰ phyi mar 'brel //
 'di ni bskyed pa'i bya byed kho na'i ste //
 ngo bo nyid rnam 'byed pa'i rten 'brel ni // 220
 chos kun kun gzhi rnam shes las sprul pa'o¹⁴¹ //
 sdug mi sdug rnam 'byed pa bcu gnyis te //
 nyer spyod can ni tshogs drug 'jug tshul lo //
 rnam shes 'byung dang 'chi 'pho skye ba dang //
 lo tog la sogs phyi yi rab dbye dang // 225
 'jig 'chags la sogs snod kyi rten (L. 23b) 'brel dang //
 zas bzhis 'tsho dang 'gro ba rnam gnyis su //
 las kyi¹⁴² 'khrid pa 'dod dang mi 'dod 'gro //
 rnam dag rab dbye lam lngas thar ba¹⁴³ (B. 24) sgrub //
 mthu stobs rab dbye mngon shes la sogs te // 230

135 *Mahāyānasamgraha* 2. 30 (Lamotte 1973, pp. 40-41).

136 LM: *phrad* [*pra ti pa*].

137 M: 'byung ba [*sa mutpata ba*].

138 M: *ltos*.

139 L: *bcas*.

140 L: *rten*.

141 B: *ba'o*.

142 DLM: *kyi*.

143 L: *pa*.

brgyad po 'di yang 'brel ba can rten 'brel //
 'chi 'pho skye ba yan lag bcu gnyis yin //
 de la'ang¹⁴⁴ skad cig pa dang 'brel ba can //
 gnas skabs pa'am rgyun chags gsum du 'dod //
 gnas skabs pa yang skye ba (D. 16a) gnyis dang gsum // 235
 rten 'brel tshar re rdzogs tshul so so ste //
 'phen 'grub bzhi ldan rgyu 'bras tshar gcig po //
 skye ba 'di¹⁴⁵ gnyis¹⁴⁶ gzhan dang 'di mi bsre¹⁴⁷ //
 sa bon 'debs dang gso ba rtogs phyir gsungs //
 tshe gsum la rdzogs rgyu 'bras tshar gnyis po¹⁴⁸ // 240
 'phen 'grub dbye ba med par bsres pa ste //
 rmongs pa rnam gsum bzlog phyir 'di yang gsungs //
 tshe gcig la yang rdzogs pa yod pa ste //
 go rim dkrug na yan lag rdzogs pa 'gal //
 skad cig pa ni skad cig gcig la tshang // 245
 'brel ba¹⁴⁹ can yang de 'dra'i rgyun tu¹⁵⁰ bzhed //
 yang na yan lag re re skad cig la¹⁵¹ //
 rim gyis 'thud¹⁵² par bshad kyang rung bar¹⁵³ mngon // ¹⁵⁴
 rje btsun gyis kyang gsungs pa //

144 L om. *la*.

145 LM om.

146 LM: *gnyis yin*.

147 L: *ste*.

148 M: *so*.

149 L: *pa*.

150 LM: *du*.

151 M: *pa*.

152 BM: *methud*.

153 BD *par*.

154 L: /.

bsgribs pa'i phyir (L. 24a) dang 'debs pa'i phyir //
 'khrid pa'i phyir dang (M. 43) kun 'dzin phyir // 250
 rdzogs byed phyir dang gsum gcod phyir //
 nye bar spyod phyir bsdud pa'i phyir //¹⁵⁵
 sbyor ba'i phyir dang mngon du'i phyir //
 sdug bsngal phyir ni 'gro nyon mongs //
 rnam gsum rnam gnyis kyang nyon mongs // 255
 rnam bdun yang dag min rtog las //¹⁵⁶

slob dpon gyis kyang bshad pa //
 gang gis 'phen¹⁵⁷ dang ji ltar gang¹⁵⁸ //
 de sgrub¹⁵⁹ byed pa'ang de la yang //
 nyes dmigs gang yin de dag rnams //
 yan lag bcu gnyis rnams kyis bstan // 260
 yan lag gnyis kyis gcig gis dang //
 rnam pa bzhi dang gnyis kyis dang //
 gcig gis gcig gis gcig gis ni //
 don bdun dag tu rab tu bstan //
 bden pa ji bzhin mi shes phyir // 265
 las kyi¹⁶⁰ sems la bsgo¹⁶¹ phyir dang //

155 *Madhyāntavibhāgākārikā* l. 10 (Nagao 1964, p. 21):

chādanād ropanāc caiva nayanāt samparigrahāt /
 pūraṇāt triparicchedād upabhogāc ca karṣaṇāt //

156 *Madhyāntavibhāgākārikā* l. 11 (Nagao 1964, p. 21):

nibandhanād ābhimukhyād duḥkhanāt kliśyate jagat /
 tredhā dvedhā ca samkleśaḥ saptadhā 'bhūtakalpanāt //

157 L: 'di

158 L: *gnas*.

159 L: *las*.

160 BM: *kyi*.

161 M: *bgo*.

yan lag bzhi ni rim gyis 'phen //
 de yi sa bon yongs brtas phyir //
 'phangs pa bzhin du skyes pa yi¹⁶² //
 tshor bas bskyed pa'i sred pa las // 270
 len pa byung bas de yi las //
 bsgos¹⁶³ pa (D. 16b) mngon du gyur pa yin //
 grub pa skye yin de la yang //
 rgas sogs nyes dmigs gang gi phyir //
 bden pa mthong la 'phen¹⁶⁴ pa med // 275
 sred (L. 24b) dang bral na 'byung ba med // ¹⁶⁵
 de la rgyu rkyen dbye ba mdor bsdus tsam¹⁶⁶ //
 shes na rten 'brel don la nges rnyed 'gyur //
 ci phyir g-yo med mi rtag mthu ldan las //
 dngos po rnam kyis skyes 'gags¹⁶⁷ byed phyir ro // 280
 byed po'i blo dang gtso sogs rtag pa dang //
 (B. 25) dus sogs mthu med mi mthun rgyu spangs¹⁶⁸ phyir //
 rgyal bas rgyu rkyen 'bras bu'i dbye ba dang //
 rten 'brel rnam pa du ma rab tu gsungs //
 rten 'brel thams cad bcos ma glo bur ba // 285
 du ba'i rnam rig me¹⁶⁹ shes las skyes dang //
 nyon mongs snang bas las kyis rnam rig bskyed //

162 L: *gis*.

163 M: *bgos*.

164 L: *'phel*.

165 *Pratītyasamutpādayākhyā*. Tib. D. No. 3995, Chi 52b2-4.

166 L: *dcol*.

167 BL: *'gag*.

168 L: *spang*.

169 D: *mi*; L: *med*; M: *mer*.

de las skyes pa'i rnam rig 'byung (M. 44) ba yin //
 rdul gyi rnam rig las ni rags snang skye //
 dbang po'i rnam rig gzugs kyi rnam rig dang // 290
 yid kyi g-yo las rnam shes 'char ba sogs //
 skye ba'i rnam rig de las skyes rnam rig //
 gnas pa'i rnam rig de las 'gag rnam rig //
 de las 'gags zin par snang rnam rig ste //
 dus gsum rnam par snang yang bden dngos med // 295
 bag chags gcig gsos de las snang ba 'byung //
 snang ba des kyang bag chags gcig shos gso //¹⁷⁰
 sa bon gso dang rnam rig rnam pa gnyis //
 phan tshun gcig gis gcig la phan 'dogs te //
 (L. 25a) gso dang rnam rig rgyun dang rgyun tu¹⁷¹ 'byung // 300
 'di dag kun rdzob gnas thabs mthar thug yin //
 rnam rig de yang rmi lam shes pa bzhin //
 gdod nas yod ma myong yang snang mi 'gag //
 rmi lam me las tshig par snang ba bzhin //
 yod med rtag chad kun las 'das pa yin // 305
 de ni don dam pa la 'jug tshul gyi //
 kun rdzob bden pa'i rim pa gcig tu 'dod //
 don dam la ni rten 'brel nam yang med //
 de la rgyu 'bras dang ni rnam gzhas bral //
 rten 'brel yin (D. 17a) phyir bdag med rnam rig phyir // 310
 chos bdag med la rab tu 'jug pa yin //

170 M: /.

171 LM: *du*.

phun po'i rgyun dang kun gzhi¹⁷² rnam shes la //
 bdag dang sems can chos su 'khrul pa¹⁷³ skyes //
 rten 'brel de dag kun rdzob rten 'brel te //
 de de'i rnam rig bdag med don dam 'jug / 315
 de 'dra'i chos dbyings de de'i snang brnyan can //
 de ni don dam kho na'i rten 'brel lo //
 de 'dra rten cing 'byung ba'i chos nyid de //
 don dam rten 'brel de ni rten 'byung min //
 gang las kyang ni ma byung ma bltos¹⁷⁴ la // 320
 mi 'gyur spros bral rtag pa yin phyir ro //
 rgyu drug rkyen bzhi 'bras bu lnga zhes grags //
 byed rgyu (M. 45) ngo bo nyid kyi rgyu yin te //
 (L. 25b) lhan cig 'byung ba grogs te mthun par rtog¹⁷⁵ /
 mtshungs ldan rgyu ste rgyas pa skal mnyam yin // 325
 kun 'gro bar gcod rnam smin yongs 'dzin no //
 mtshungs ldan sems dang sems byung rgyu dmigs dang //
 yul dang rnam pa gcig pa de yin pas //
 dgos pa'i dbang yin lhan cig 'byung bar¹⁷⁶ 'dus //
 'di la phyi nang gnyis yod mtshan nyid dang // 330
 (B. 26) mtshan gzhi sems dang sems byung¹⁷⁷ 'byung sogs bzhin //
 de yang sa rdul skad cig dang po de //
 chu me rlung gsum gnyis pa'i lhan cig rgyu //

172 M: *gzhi*'i.

173 BM: *ba*.

174 BD: *ltos*.

175 M: *rtogs*.

176 BD: *par*.

177 D: *'byung*.

de bzhin phan tshun re rer sbyar bar bya //
 'on kyang dngos 'bras dngos rgyu thogs med nus // 335
 dus mnyam 'byung bar snang ba'ang de yin no //
 kun 'gro nyon mongs las ni nyon mongs skye //
 nang tshan rigs dang sa sogs ma nges pa //
 'di yang skal mnyam khongs su phal cher 'du //
 de ni mthun pa'i rgyu ste dge sogs dge / 340
 sa mtshungs la sogs mtshungs pa bskyed par 'dod //
 mi mthun dge mi dge las lung ma bstan //
 skye 'gyur de ni rnam par smin pa'i rgyu //
 byed rgyu nus med 'thad pa ma yin pas //
 byed par bcas pa byed pa'i rgyu yin no // 345
 'bras bu 'byung dang 'tsho dang rten dang gnas //
 'gyur dang 'bral dang bzo dang gtan tshigs dang //
 'bras (L. 26a) thob 'phen (D. 17b) dang 'grub dang bar chad byed //
 rnyings par¹⁷⁸ byed dang 'jig par byed pa dang //
 nges par byed dang ma nges byed la sogs // 350
 mdor na rgyu kun byed pa'i rgyu yin yang //
 skyes bus¹⁷⁹ byed pa logs¹⁸⁰ su sngar las dbye //
 kun gyi rgyu rkyen kun gzhi¹⁸¹ rnam shes te //
 lhan cig 'byung sogs rgyu lnga rgyu ru 'dod //
 nyer len rgyu ni nges par 'dir 'thad do // 355
 lhag ma rnams ni lhan cig byed rkyen yin //

178 B: *rnying bar*; L: *snyings par*.

179 L: *bu'i*.

180 D: *log*.

181 L: *gzhi'i*.

dmigs (M. 46) rkyen mthong dang dmigs pa'i yul yin te //
 bdag po zhes bya rten te byed rgyur 'dus //
 de ma thag rkyen rang mtshungs rgyur¹⁸² gcig pa'i //
 'das ma thag 'dod 'di dang dmigs pa'i rkyen // 360
 'dzin chos la yin gzhan la rkyen gnyis so¹⁸³ //
 de ma thag pa go 'byed las can nam //
 yang na yul la phyogs par byed 'dod de //
 snga ma ltar na gzugs sogs la yod 'gyur //
 'dzin cha kun la'ang rkyen gzhir¹⁸⁴ ma nges te // 365
 srid pa'i dbang byas bral 'bras bskyed rgyu med //
 brtags¹⁸⁵ 'gog bral 'bras dngos yin kun rdzob ste //
 don dam bral ba dngos te 'bras bu brtags //
 bdag 'bras yul dang rnam smin rgyud kyis bsdu //
 byed rgyu'i sgo nas byung gang byed 'bras te // 370
 skal mnyam (L. 26b) 'bras bu rgyu mthun zhes bya'o //
 gtso bor brjod kyis mtha' gcig kho nar min //
 rgyu rnam thams cad nges par gnyis su 'dus //
 rgyu las byung na de la bltos¹⁸⁶ par 'gyur //
 bltos¹⁸⁷ pa thams cad rang gi ngo bos med // 375
 rnam gzahag phan tshun bltos¹⁸⁸ pas rnam gzahag¹⁸⁹ 'jig /

182 注釈は rgyud と読む。

183 L: *ngos*.

184 注釈は bzhi と読む。

185 L: *brtag*.

186 BM: *ltos*.

187 BM: *ltos*.

188 BM: *ltos*.

189 B: *bzhag*.

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第 5 章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）

de tsam kho nas ngo bo bltos¹⁹⁰ mi 'grub //

ri¹⁹¹ gnyis phan tshun bltos¹⁹² pa med pa bzhin //

g-yas kyi 'jog byed g-yon (B. 27) pa yin ces¹⁹³ pa //

g-yas kyi rnam gzhag g-yon gyi rnam gzhag la // 380

bltos¹⁹⁴ par song gi dngos po bltos¹⁹⁵ pa min //

de phyir rten 'brel gtso bo bskyed¹⁹⁶ par brjod¹⁹⁷ //

ces¹⁹⁸ pa chos lnga dang rang bzhin gsum dang rten 'brel gtan la dbab¹⁹⁹ pa'i

rab tu byed (D. 18a) pa ste lnga pa'o²⁰⁰ //

参考文献

Buescher, Hartmut

2007 *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya*, Wien, 2007.

Lamotte, Étienne

1973 *La somme du grand véhicule d'Asaṅga (Mahāyānasamgraha)*, Louvain.

Lévi, Sylvain

1925 *Vijñaptimātratāsiddhi, Deux traits de Vasubandhu, Viṃśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Triṃśikā (la Trentaine) avec la commentaire de Sthiramati*, Paris.

1907 *Mahāyānasūtrālaṃkāra*, tome I, Paris.

Nagao, Gadjin M.

1964 *Madhyāntavibhāṅgabhāṣya*, Tokyo.

de la Vallée Poussin, Louis

190 BM: *ltos*.

191 L: *re*.

192 BM: *ltos*.

193 BM: *zhes*.

194 BM: *ltos*.

195 BM: *ltos*.

196 L: *bskyes*.

197 L: *mdzod*.

198 D: *zhes*.

199 L: *bab*.

200 BD: *ba'o*.

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第5章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）

1977 *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti*, repr., Tokyo.

Pradhan, Pralhad

1950 *Abhidharma Samuccaya of Asaṅga*, Santiniketan.

1967 *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Patna.

Sonam Rabten

2004 *Ācārya Nāgārjuna's Āryaśālistambakakārikā with the Autocommentary*, Sarnath.

Tatia, Nathmal

1976 *Abhidharmasamuccayabhāṣyam*, Patna.

荒牧典俊

1976 「唯識三十論」『大乘仏典15 世親論集』中央公論社.

宇井伯寿

1961 『大乘莊嚴經論研究』岩波書店.

瓜生津隆真

1974 「因縁心論（縁起の精要）」『大乘仏典14 龍樹論集』中央公論社.

大南龍昇

1984 「チベット語訳ナーガールジュナ造『聖稻竿經頌』・和訳」『長谷川仏教文化研究所年報』11, pp. 1-48.

1991 「チベット訳稻竿經『広疏』・『広釈』和訳（V）」『長谷川仏教文化研究所年報』19, pp. 52-112.

小川一乗

1976 『空性思想の研究—入中論の解説—』文栄堂.

小谷信千代・本庄良文

2007 『俱舍論の原典解明 随眠品』大蔵出版.

梶山雄一

2010 「中観派の十二支縁起解釈」御牧克巳編『梶山雄一著作集第五巻 中観と空Ⅱ』春秋社.

菅沼 晃

1970 「五法説の研究—とくに瑜伽師地論・顕揚聖教論・中辺分別論等を中心に—」『東洋大学紀要 文学部篇』24, pp. 31-47.

1971 「入楞伽經における五法説の研究」『東洋学研究』5, pp. 203-221.

勝呂信静

2009 『唯識思想の形成と展開』山喜房佛書林.

長尾雅人

1976 「中辺分別論」『大乘仏典15 世親論集』中央公論社.

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第5章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）

1982 『摂大乘論 上』講談社.

南條文雄

1923 『梵文入楞伽經』大谷大学.

早島 理

2003 『梵藏漢対校『大乘阿毘達磨雜集論』・『大乘阿毘達磨雜集論』第1巻 本事分』
私家版.

平川 彰

1988 『平川彰著作集第1巻 法と縁起』春秋社.

舟橋尚哉

1972 「五法と三性について」『印度学仏教学研究』21-1, pp. 371-376.

松田和信

1974 「縁起にかんする『雜阿含』の三經典」『仏教学研究』14, pp. 89-99.

1972 「『分別縁起初勝法門經 (ĀVVS)』一經量部世親の縁起説一」『仏教学セミナー』
36, pp. 40-70.

1983 「Abhidharmasamuccaya における十二支縁起の解釈」『真宗総合研究所紀要』
1, pp. 29-50.

安井広済

1976 『梵文和訳入楞伽經』法蔵館.

山口 益・舟橋一哉

1925 『俱舍論の原典解明 世間品』法蔵館.

山口 益

1966 『漢藏対照 弁中辺論』鈴木学術財団.

横山絃一

2010 『唯識 仏教辞典』春秋社.

（本研究は平成22年度科学研究費補助金「基盤研究（C）」による研究成果の一部である）

[付記] 本誌前号に掲載した拙稿「ラトナーカラシャーンティ『經集解説・宝明莊嚴論』
和訳(6)」において典拠不明の典籍について、小林守先生（苫小牧駒沢大学）より以下
のご教示をいただいた。ここに記して御礼申し上げる。いずれも典拠不明とすべき引用
ではなく、恥ずかしい思いであるが、最後の引用については、ここでもマイトレーヤの
著書として引用されている。

p. 16, 注39 *Ratnāvali* 1. 35ab

p. 21, 注48 *Abhidharmakośakarika* 8. 39

p. 41, 注93 *Yuktiṣaṣṭhikakarika* 34

Tāranātha の *dBu ma theg mchog* 第 5 章「五法と三性と縁起の決択」について（望月）

p. 46, 注104 *Anavataptanāgārājaparipṛcchā* (Cf. Prasannapadā, p. 239 *et al.*)

p. 56, 注126 *Madhyāntavibhāgākārikā* 1. 16cd

p. 62, 注137 *Triṃśikākārikā* 23